実践事例　小学校５年

道徳の時間で活用する
～伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度～

阿武町立福賀小学校　岡　輝明

1　本実践におけるポイント

● 特別な教科としての道徳（習得）

予習や授業の中で、「箸の作法（使い方）」を学び、生きる道徳的知識として将来役立つように意図した。

● アクティブ・ラーニング（活用）

授業後も食事のたびに学習が思い起こされ、自己の振り返りができるように意図した。

● 価値を伝え、深める（探究）

マナーとしての道徳を家族や次世代に伝え、自らも日本人としての誇りを探究できるように意図した。

2　授業の実際

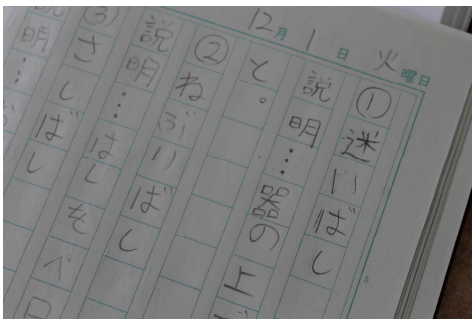
１　主題名　あなたは、日本のすばらしさを知っていますか

２　ねらい

和食を作る人の思いと、それを食する人の思いを対比することを通して、自分の箸使いを振り返りながら、日本の心理文化（思いやり）を敬愛する心情を育てる。

３　展開　「私たちの道徳（5・6年 P166～167）」活用

（１）授業前：箸作法を調べておき、箸を用いながら説明できるようにしておく。



「迷いばし」「ねぶりばし」「差しばし」「叩（たた）きばし」など、よくない箸使いを調べてきた。

家族に尋ね、その日の夕食は「箸使い」の話でもちきりだったようだ。

（２）授　業

◇「日本のすばらしいところ（もの）を知っていますか。」
（他にもありますよ。「**私たちの道徳**」で確認。）
（和食は、世界に認められた日本の文化です。）

◇「なぜ、和食が世界遺産に登録されたのでしょう。」

◇「和食をつくる人は、どんな思いで作っているのでしょう。」

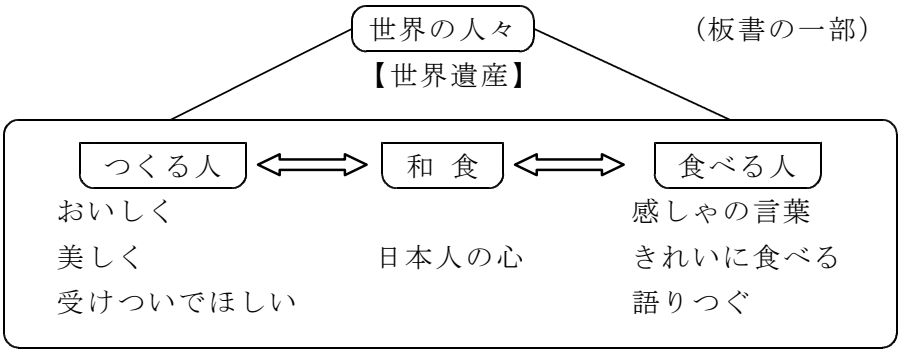
◇「食べる人（あなた）は、その思いに応えるために、どうすればいいのでしょう。」

（きれいに食べる、残さず食べる、感謝の言葉を言う、きれいな箸使いをする。）

◇「皆さんは、そんな食べ方ができていますか。」

◇「箸の使い方のような面倒なことは、止めてしまえばいいと思いませんか。」

（和食を作る人、それを食べる人の思いの全てが世界遺産になったような気がします。みんなは、どう思いますか。）



（板書の一部）

◇「美しい箸の使い方は残したいと言ったけれど、『残す』とは、どうすることですか」

（教師の説話）

ある料理人から「味をよくするのは『愛、形をよくするのは敬』」と聞いた。

先生はその後、食事を作ってくれる妻に感謝するようになった。今では、弁当箱は洗って持ち帰っている。

3　実践を振り返って

子どもたちは、和食の写真を見て「美味しそう。」「きれい。」と発言した。しかし、「おいしく、きれいでありさえすれば、世界遺産に認定されるのかな。」と問えば、他に秘密があるような気がするという表情をした。本時の場合、「日本のすばらしさ」は上記板書の一部の矢印の部分に存在しているといえる。

【確かな道徳的価値は、「三方（者）よし」に帰着する】

私は、本時を「和食」「和食を作る人」「和食を食べる人」の三者関係の中で価値を多角的に捉えさせようとした。

道徳の授業を構成する場合、三者の関係性を構造化し（見つけられない場合は、三人目の対象をあえて設定し）、それぞれの思いを整理していくうちに、自分の価値が高まるのだと考えている。「三方よし（三者全てが幸せか）」の考え方は、道徳的思考原理の一つであろう。

【子どもの心に住み続ける価値を求めて】

また、高められた価値が子どもの心の中に留まり続けるものが、よい道徳の授業だと考えている。本時以降、子どもたちは給食のたびに、本時の授業を思い出しているようだ。子どもたちの日々接するものに題材を見つけ、教材化することが求められる。